奈良のこと（古都）

（５）　薬師寺・唐招提寺

１月の若草山・山焼きの時には、大池に朝から写真家が集まり場所取りが始まる。
（右の写真は大池からの雪景色）
我が家は大池から５分ほどの所にあり、朝と夕方の５時に薬師寺の鐘の音が聞こえる。
薬師寺や唐招提寺へは歩いて１５分くらいである。

＊薬師寺＊

天武天皇が皇后（鸕野讃良（うののさらら）：後の持統天皇）の病気平癒を祈願するため、「薬師如来」の造像を発願された。６８０年に藤原京で造営が始まったものの、完成を待たず天武天皇は崩御され、孫の文武天皇の代に漸く完成する。

平城遷都に伴い７１８年に現在の地に移る。薬師寺式伽藍は、南門、中門、金堂、講堂が一直線に並び、金堂前に東塔、西塔を配置している。室町時代の戦火などで、創建当初の建物は東塔のみとなっていたが、高田好胤師が１９６８年に始めた写経勧進により、１９７６年に先ず金堂を再建した。その後も伽藍の復興を進め、今では回廊を有する美しい白鳳伽藍が再現された。

東塔は、フェノロサが「凍れる音楽」と呼んだことでも有名で、一見すると六重の塔に見えるが、各階に裳階（もこし）を持った三重の塔である。天平の美しい姿から１３００年の歴史が感じられる。この塔は２０１１年秋から解体修理に入り、当分（２０１８年頃まで）は見ることが出来なくなる。
（写真は満開の桜を透かして西塔）

再建された金堂は国宝や重要文化財ではないが、天平時代に創建された当初の美しい姿を見ることが出来る。外観だけではなく天井に描かれた蓮の花なども美しく、奈良の枕詞

「あをによし」そのものである。（あを：窓の緑色、に：柱の赤色、よし：美しい、
つまり奈良の都には、窓は緑、柱は赤、壁は白の美しい建物が立ち並んでいた。）
　金堂の本尊は国宝の薬師三尊で、薬師如来、日光・月光の両菩薩は、天平の最高傑作といわれる美しいブロンズ像である。薬師如来の台座は薬箱になっており、この薬箱の装飾にはシルクロードの国々の文化が散りばめられていて、とても素晴らしい。
例えば、ギリシャの葡萄唐草文、インドの鬼人像、中国の四神像、ペルシャの宝石文、などである。イミテーションが食堂跡に作られた講話会場にあり、ユックリと見る事が出来る。

＊玄奘三蔵院＊

　薬師寺は興福寺と共に南都六宗の一つである法相宗大本山である。法相宗の宗祖は慈恩大師であり、慈恩大師は玄奘三蔵の弟子で、玄奘が６４５年（日本では大化の改新）に長安に戻った後、唯識思想の教えを受けた最優秀の愛弟子である。
（玄奘は、帰国後２０年の間持ち帰った膨大な教典の翻訳を行った。
その数は７５部１３３５巻といわれ、その中でも「大般若経」６００巻が有名である。）
（三蔵法師といえば玄奘が有名であるが、一般に釈迦の教え「経」、戒律の「律」、経と律を研究した「論」の三つを究めた僧に三蔵の称号が与えられている。日本人ではただ一人、興福寺僧・霊仙三蔵がいる。）
　薬師寺では、玄奘を始祖としており、玄奘三蔵院の玄奘塔には玄奘の頂骨を納めている。その北側にある大唐西域壁画殿には、平山郁夫画伯の描いた「大唐西域壁画」があり、玄奘が長安を旅立ち、砂漠やヒマラヤの山路をたどり、インドのナーランダに至るまでの風景が、大壁画としてお祀りしてある。

＊休ヶ岡八幡宮＊

　薬師寺の駐車場から南門に行く途中にある休ヶ岡八幡宮は、薬師寺の守り神である。
宇佐八幡宮の分社で、本殿には３体の神像が祀られていたが、今は国立奈良博物館に寄託されている。３体は、僧形八幡神（応神天皇）、神功皇后、仲津姫（応神天応皇后）で、何れも国宝である。本来神像は鏡、玉、剣などとして現されることが多いが、神仏習合で神が仏教に帰依し、剃髪し僧形となったものと思われる。
（他にも東大寺、東寺の僧形八幡神像があり何れも国宝である。）

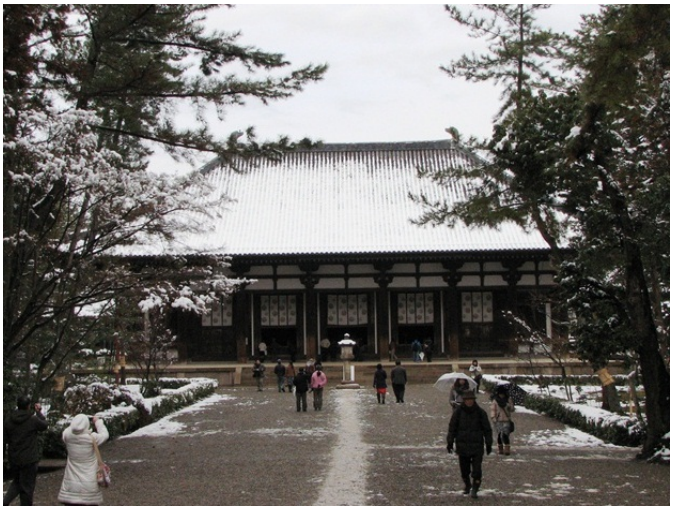
＊唐招提寺＊

　私は森に囲まれた静寂な雰囲気がとても好きで、ここに来るといつも安堵感を覚える。
鑑真は７５４年に来日、東大寺に５年を過ごした後、７５９年に故新田部（にたべ）親王（天武天皇の子）の旧宅地を下賜されて、唐招提寺（最初は唐律招提（戒律を学ぶ道場）と呼ばれた。）を開いた。当初は講堂（平城宮東朝集殿を移築・改造）と校倉造りの経蔵、宝蔵のみであったが、その後に金堂が建てられた。金堂、講堂、鼓楼、経蔵、宝蔵は、国宝である。
　金堂は２００９年秋に解体修理を終え、エンタシスの柱を持つ優美な姿は、天平の息吹を今に伝えている。大棟の左右にある鴟尾（井上靖の小説「天平の甍」のモデルになった棟瓦）は、今回の修理で新しいものに替えられ、西のものは、創建当初のものであったが、今は１３００年の歴史を刻んで境内の新宝蔵で静かに休んでいる。

歌人・会津八一は月の光に照らされた金堂で、次の歌を詠んだ。

おほてらの まろきはしらの つきかげを つちにふみつつ ものをこそおもへ

金堂の本尊は盧舎那仏座像で光背に千体の化仏を持つ、その両脇には千手観音立像と薬師如来立像が控えており、何れも国宝で３ｍから５ｍの大きな仏像ばかりである。



千手観音は千本の手で、あらゆる願いを叶えて下さる仏で、通常は４２本の手で構成されている。（合掌する２本を除く４０本の手で、千手を代表させるものが多い。）

唐招提寺の千手観音は創建当初には１０００本の手を有していたようで、現在でも９５３本の手を持っており、国内でも珍しい存在である。

金堂の裏、講堂との間に鼓楼（舎利殿：鑑真が唐より招来の仏舎利を納めている。）は、５月１９日の梵網会（ぼんもうえ）で、ここからうちわが撒かれる。

＊御影堂＊

鑑真の座像（国宝）を安置している。建物は旧興福寺一条院（の宸殿）を移築したもので、内部は東山魁夷画伯の障壁画（鑑真に故郷中国と日本の風景を奉納し、御霊を慰めるために描かれた。）で飾られている。（毎年６月６日の鑑真命日前後に公開される）

障壁画：　「宸殿の間」に『濤声』16 面、「上段の間」に『山雲』10 面、「松の間」に『揚州薫風』26 面、「桜の間」に『黄山暁雲』8 面、「梅の間」に『桂林月宵』8 面

＊御廟＊

境内の一番北の奥まったところに鑑真の墓があり、中国の要人が来日の時には参拝されることが多い。最近では今の主席胡錦濤（こきんとう）氏が来られた。

鑑真和上の御廟のそばと、御影堂供華園では、鑑真の故郷・揚州の花、瓊花（けいか）が、あじさいに似た白い花を咲かせて見事である。（４月下旬から５月上旬には、御影堂供華園が特別に公開される。）

西の京は奈良公園から離れており静かな所であったが、最近は観光バスで来る修学旅行生や団体の観光客が増え賑やかになってしまった。

（色染・昭３５　坂東久平）